

モンゴル語¹⁾の語末に見られる「不定のn」²⁾について³⁾

山越 康裕

1. 序

個別言語の研究を行う際に、その言語特有の、つまり自分の母語や比較的「よく知られた」言語と対照したときに違いを感じるような言語形式に着目し、構造解釈を行うという方法が一つ考えられる。このような研究の場合、いわゆる一般言語学の研究としての意義を欠いたものになる場合もあるものの、当該の個別言語研究の流れにおいて重要な位置を占めるのであれば(少なくともその研究分野においては)充分研究に値する意義をもつ。本稿は寧ろこうしたモンゴル語研究の流れに沿った研究であることを予め断っておきたい。

モンゴル語学の術語に「不定のn」と呼ばれるものがある。「モンゴル語の一部の語彙の語末において特定の統語条件下で保持されるn音終わりの語幹形」とモンゴル語研究の文脈において通常説明される(Bosson1964:20, Hangin1968:23, Sanders and Bat-Ireedüi1999:20)が、実際には語幹の交替には意味の変化が関与しているように見受けられる。

そこで本稿では実際に意味の変化があるのかどうかについて検証し、性質を明らかにすることを目的に据える。そのためにまず研究対象となる「不定のn」の統語上の特徴、モンゴル語研究における先行研究を概観した上で「不定のn」の現れる統語条件の一つである「他の名詞を限定する場合」に焦点を絞り、用例を分類、観察し、「他の名詞を限定する」もう一つの用法である属格形による限定との差異を見た後、更に他の出現条件について補足的に考察する、という順序で論を進めていく。

2. 「不定のn」の概説

まず最初に、「不定のn」がどういうものであるのか、どのような場合に現われるのかを簡単に概説する。

「不定のn」

モンゴル語の一部の名詞及び数詞に見られる $\emptyset \sim n$ の交替語幹の語末に現れるnを指す。名詞における「不定のn」は、

1. 属格、与位格、奪格接尾辞が接続するとき

例: mori-n-y	del	馬のたてがみ	(1) ⁴⁾
馬-n-gen. ^{*本文表1参照}	たてがみ		
mori-n-d	ögöx	馬に(何かを)やる	(2)
馬-n-dat.	あげる(V)-v.n.		
mori-n-oos	ajx	馬を恐れる	(3)
馬-n-abl.	恐れる(V)-v.n.		
cf. mori-toj	irex	馬に乗って来る	(4)
馬- \emptyset -com.	来る(V)-v.n.		

2. 「～と共に」を表す用法で造格接尾辞が接続するとき→例は(55)を参照。

3. 直後に/d/で始まる位置をあらわす副詞が接続するとき

例: mori-n	deer	馬の上に	(5)
馬-n	上に		

4. 後続の名詞を限定するとき

例： mori-n tereg 馬車 (6)
 馬-n 車

に現われる。(栗林1992b:506)

(数詞における「不定のn」については省略、後述する)

「不定のn」が現われる条件は以上の通りである。

モンゴル語学において、「不定のn」は通時的側面からの、特に起源や変化に関する研究は数多くなされてきたものの、実際の文中での機能についてはあまり触れられず、単に統語上の制約として説明されることが多い。その中で現在のモンゴル語研究の礎を築いたモンゴル語学者、Лувсанвандан(1980)は「不定のn」が意味に変化をもたらすことを示唆している。

「不定のn」で終わる語は、行為、様態の目的語となる物質、物体を示す語に見られ、具体的な物を示す σ 語幹形には動作、様態の主もしくは直接目的語となったり道具を示したりという具体的な物を示す主格、対格、造格、共同格といった格接尾辞が接続し、抽象的な性質等を示す(「不定のn」の現われた)-n語幹形には原料や関連のもの、動作、状態の場所、時、原因等きわめて抽象的なものを示す属格、与位格、奪格接尾辞が接続する。(Лувсанвандан1980:156)

更に「『不定のn』は当該の物質名詞の意味を抽象化する役割を果たす」(Лувсанвандан1980:156)と言及している。しかし具体的な格、抽象的な格の定義が明確でなく、さらに「抽象化」が何を意味するのかについては言及していない。

又、Лувсанвандан(1980)は「本来の『不定のn』は古モンゴル語(ertnij mongol xel)⁶⁾において語末が常に/n/で終わっていた語彙の一部の語の/n/が不定となったもの」(同:149)であり、なおかつ「モンゴル語固有の語⁶⁾に存在する」(同:149)と定義しているものの、近代語彙として借用された語の中にも $\sigma \sim n/N$ 交替語幹を持つものが見られる。このような語については「新しい『不定のn』であり、無秩序なものである」(同:157)とし、別個のものとしている。

しかし、同じ統語条件で現れる事実を考えた場合、当然同一のものと認められるはずであるため、ここでは「新しい『不定のn』」とされるものも区別せず「不定のn」に含めた上で考察をすすめたい。また、「不定のn」の出現に関しては多分に音韻上の影響があると思われるが、本稿の目的は文法的、意味的機能を見ることにあるため、音韻条件についての考察は割愛する。そのためにまず、音韻上の影響が最も少ないと思われる「不定のn」の名詞限定用法(上記出現条件の4.)に注目していく⁷⁾。

3. 「不定のn」による限定例

3. 1. 名詞結合の種類

まず、ある名詞(N1)がもう一つの名詞(N2)を限定するためには、N1とN2が結合することが前提となる。

モンゴル語におけるこうした名詞同士の結合には、構造上以下の三つが考えられる。(7)-(9)

1). σ 語幹による複合語(xorshoo üg)形成

NP: N1- σ + N2 貨幣 (7)
 mōnggō zoos
 銀(N1) + 貨幣(N2)

2). 「不定のn」による結合（「不定のn」を持たない名詞は直接結合）

NP: N1-n → N2
 möngö-n zoos 銀貨 (8)
 銀(N1)-n → 貨幣(N2)

3). 属格による結合

NP: N1-gen. → N2
 möngö-n-ij zoos ムンゲン(人名)の所持金(9)⁹⁾
 銀(N1)-n-gen. → 貨幣(N2)

cf. NP: Adj. → N⁹⁾

tom bajshin 大きな建物 (10)
 大きい(Adj.) → 建物(N)

上記三つのうち、N1がN2を限定する（→）のは2).及び3).二つの結合方法である。つまりモンゴル語には名詞による限定が二種類存在する、ということになる。単なる並置1).の際には「不定のn」は現れない、という点から、(最初の出現条件と堂々巡りになるが)「限定」「被限定」を示す標識として機能しているといえる。

3. 2. 名詞の「不定のn」による限定用法

では次に「不定のn」による限定用法を例示する。

ただしN1とN2との間における意味関係の網羅的な記述は不可能に近いので、主な用法を提示するのみに止める¹⁰⁾。

なお、同時に同じN1, N2が属格接尾辞によって結合した名詞句NP[N1-gen. → N2]との意味の差異も見ていくことにする。

(文例中の*は、モンゴル語の文として意味的に不適格な文であることを示す。又、?は実際の言語運用の場面では使用しないものの、意味解釈が可能であるような文であることを示す)

①[全体]の限定

N2が材料、原料であるN1から形成されている、という意味関係に基づく限定。(11)

bulga-n malgaj 黒貂の(毛皮で作った)帽子
 黒貂-n → 帽子
 ?bulga-n-y malgaj 黒貂の(被る)帽子 (11)
 黒貂-gen. → 帽子

②[部分-全体]の限定

N1がN2を形成するための要素である、という意味関係に基づく限定。(12)

cagaan shüde-n Donzhuu 白い歯のドンジョー(人名)
 白い(Adj.) 歯-n → ドンジョー
 *cagaan shüd-n-ij Donzhuu *白い歯のドンジョー (12)
 白い(Adj.) 歯-gen. → ドンジョー

(12)上は、*shüden Donzhuu (歯のドンジョー)の場合成立しない。「歯」があるのは人間であるN2にしてみれば自然な状態であり、あえて限定する必要がないためである。つまりN1は単に要素の一つになるだけでなく、限定詞として当然他のものと区別しうる特徴的な部分を限定する必要がある。

③[媒体]の限定

①, ②はN1がN2の「内部」に組み込まれているのに対し, この限定用法は「外部」からN1がN2の媒体として関与する。(13)-(15)

mori-n	tereg	馬車	
馬-n →	車		
?mori-n-y	tereg	馬を運ぶ車 ¹¹⁾	(13)
馬-gen. →	車		

tarvaga-n	taxal	ペスト ¹²⁾	
タルバガ(動物名)-n →	伝染病		
?tarvag-n-y	taxal	タルバガのかかる伝染病	(14)
タルバガ-gen. →	伝染病		

xuruu-n	xemzhee	指を単位とした長さの基準	
指-n →	規模		
xuruu-n-y	xemzhee	指の長さ	(15)
指-gen. →	規模		

④[全体-部分]の限定

この④に分類されるNPは, 比喩により本来のN2の指示対象とは異なる物を指示対象とする点に特徴がある。N1の一部分がN2, という関係にあり, N1には動物語彙がくるものが殆どである。(16)(17)

zagasa-n	süül	(船の)舵	
魚-n →	尻尾		
zagas-n-y	süül	魚の尾	(16)
魚-gen. →	尻尾		

jamaa-n	saxal	植物名;ラテン名Tragopogon	
山羊-n →	髭		
jamaa-n-y	saxal	山羊のひげ	(17)
山羊-gen. →	髭		

⑤[場所]の限定

N1がN2の存在する場所を限定する用法である。(18)(19)

usa-n	ongoc	船	
水-n →	船		
?us-n-y	ongoc	水運搬船 ¹¹⁾	(18)
水-gen. →	船		

usa-n	cereg	水軍, 海軍	
水-n →	軍		
?us-n-y	cereg	給水部隊 ¹¹⁾	(19)
水-gen. →	軍		

⑥[外面比喩]の限定

N1の指示対象の外見的特徴によりN2を比喩する限定用法である。(20)(21)

zagasa-n	talx	細長いパン	
魚-n →	パン		

?zagas-n-y	talx	魚の(食べる)パン	(20)
魚-gen. →	パン		

mori-n	melxij	大きいカエル(ガマガエル?)	
馬-n →	蛙		
?mori-n-y	melxij	馬の(飼っている)蛙	(21)
馬-gen. →	蛙		

⑦[内面比喻]の限定

⑥と同じく比喻による限定である。⑥が外見特徴を捉えているのに対し、この用法はN1の指示対象の内面的な特徴によりN2を限定する。(22)

azraga-n	boroo	激しい雨	
種馬-n →	雨		
*azrag-n-y	boroo	*種馬の雨	(22)
種馬-gen. →	雨		

⑧[その他属性]の限定

この限定用法は今までの①~⑦の分類に入らないもの、及び物質名詞とは捉えにくい指示対象を持つN1による限定用法である。(23)-(25)

azraga-n	ilzhig	雄ロバ	
種馬-n →	ロバ		
?azrag-n-y	ilzhig	種馬の(飼っている)ロバ	(23)
種馬-gen. →	ロバ		

tüüxe-n	aviazūj	通時音韻論	
歴史-n →	音声学		
*tüüx-ijn	aviazūj	*歴史の音韻論	(24)
歴史-gen. →	音声学		

tüüxe-n	roman	歴史小説	
歴史-n →	小説		
tüüx-ijn	roman	歴史, 人生の小説(性), 又は同上(25)	
歴史-gen. →	小説		

4. 考察

4. 1. 属格の機能

「不定のn」に関する考察を行う前に、まずは属格による限定について見てみたい。上例を見ると、モンゴル語における属格による限定は基本的に所属、所有をあらわしていることが分かる。(11)下-(25)下

これは固有名詞(人名, 地名)をN1にたてるとわかり易い。(26)

?Dorzh-ijn	süül	ドルジの(体の一部である)尻尾	(26)
ドルジ-gen. →	尻尾		

N2をN1の所有物である、若はN1の体の一部であるという様に限定できるのである。つまり、(26)の場合N2にたつ名詞は「ドルジの所有するもの」であることを満たせばよい。

さらに属格による限定ではN1の指示内容が単独で用いられる場合と同一である、といえる。「不定のn」による結合の場合、N1の指示内容は単独で用いられる場合とは、[比

喩]であればN1の突出した特徴が, [材料]であれば加工物としてのN1の側面が強調されるように幾分異なる。しかし, 属格接尾辞による限定の場合, 本来のN1の指示内容を保持したままN2を限定しているといえる。

4. 2. 「不定のn」の機能

前項で述べたN1の指示内容の違い, という点から, 「不定のn」を「意味成分, もしくは補助的成分の抽出を行う接辞的要素」とであると仮定する。

つまり, 「不定のn」を持つ語の指示対象に備わっている「意味」を構成している成分の一部のみが「不定のn」が現われることにより抽出され表面に出てくる, というわけである。例えば, "azraga(n)"という語について見よう。この語の指示対象には「3歳以上の去勢していない雄馬」(Цэвэл1966:25)があてられる。この時点で意味上の弁別特徴として[3歳以上], [生殖能力を持つ], [雄], [馬]といったものが挙げられ, 更に"azraga(n)"には「気性が激しい」ことや「馬群の中心的存在である」ことなどの内包的意味(リーチ1977:15-18)が社会的に与えられている。こういった成分のうち, (22)では[(気性の)激しさ]といった成分のみが, 又(23)では[雄]成分のみがそれぞれ抽出され, 他の成分は相対的に表面から隠れる, と解釈できる。

おそらくЛувсанвандан(1980:156)のいう「抽象化」はこのうちの「内包的意味の表面化」について述べたものと思われるが, 単にそればかりとは言い切れない例(16)上-(19)上もあるために筆者は別の表現を用いた。

更に「モンゴル語固有の物質名詞に『不定のn』が存在する」という点についてだが, まず「物質名詞」とする点に対する例外(24)(25)の存在から否定できる。これは, 非物質名詞は実際に指示対象を図示できる物質名詞と比べ具体的な意味成分が付与されにくい, との理由から結果として「不定のn」による限定が少ないだけではないか, と推測する。「物質名詞」と範囲を定めるだけでなく, 非物質名詞においても表面化するような意味成分を持っていれば限定は可能である。(24), (25)も(22), (23)同様, N1である"tüüx(en)"の意味成分の異なる部分(時間の流れであったり, 過去の出来事であったり¹³⁾)がそれぞれ抽出され, 表面化したものといえよう。

また, 2.で述べたような借用語に現れる「不定のn」については以下のような例がみられる。(27)(28)

tujpuu-n	bajshin	煉瓦造りの家	(27)
煉瓦-n →	建物		
bjeton-on	garaash	コンクリートのガレージ	(28)
コンクリート-n→	ガレージ		

(27)N1は中国語"土坯tu³pi¹:煉瓦"¹⁴⁾, (28)N1はロシア語"бетон"からの借用語¹⁵⁾であり, 特に(28)に関してはЛувсанвандан(1980)のいう「古典期モンゴル語」の時期に語彙として取り入れられていたとは考えられない。

上の仮説にのっとってみると, 意味的に見て(27), (28)の様に3.2.①に分類されるN1は, 元来「(N2の)原料と成りうるもの」としての成分を備えている為, 借用語であっても「不定のn」が新たに付与されやすいのだと解釈できる。結局, N2に結び付きうる「意味成分」がN1に備わっていれば, 「モンゴル語固有の物質名詞」であることは問題とはならない。

さて, 抽出されうる成分は各名詞によって, 又それによって限定されうる被限定辞(N2)によってそれぞれ異なる。傾向として社会的に与えられた内包的意味による限定

わせからなることが多い(Wierzbicka1988:472)と捉えられているからである。この面から見ると、成分の一部が抽出され他の成分が隠れる、という筆者の仮説は「成分の単一化」であるとも換言でき、形容詞の性質に非常によく似通うことになる。ただし、機能の上で「不定のn」の現われた名詞による限定の場合、叙述用法ができない点(38)、被限定辞によって抽出される意味成分が全く異なる点、強意の副詞によって意味を強められない点(39)などが形容詞と異なる。

ter	bajshin	tom.	あの建物は大きい。	
[あの	建物]S	[大きい(Adj.)]O		
*ter	bajshin	modo-n	*あの建物は木製だ。	(38)
[あの	建物]S	[木-n]O		
mash	tom	zögij	とても大きなミツバチ	
とても	大きい(Adj.)→	ミツバチ		
*mash	morin	zögij	*とても馬な?ミツバチ	
とても	馬-n →	ミツバチ		(39)

4. 3. 属格との再比較

ここで、N1とN2の意味関係が二種類の限定(「不定のn」による限定、属格による限定)においてあまり差が無い様にみえる限定用法について筆者の仮説に則った上、詳しく見ていく。

4. 3. 1. 「不定のn」の[一部抽出]限定用法と属格による限定

まず、3.2.④に分類されるものと属格による限定との比較をしたい。

3.2.④の分類の特徴は、NPが本来の指示対象物となるはずのN2とは異なるものを指示する点にある。[場所]の限定に比べ、単なる限定ではないという点で属格による限定との区別をつけやすいが、この用法に限り「不定のn」を持たない名詞がN1に位置するとき、属格によりN2を限定する。(40)(41)

üxr-ijn	nüd	黒すぐり	(40)
牛-gen. →	目		

üxer	degd	大葉りんどう	(41)
牛-ø →	りんどう		

(41)は「不定のn」限定でいえば⑥に分類されるものである。一方(40)は(17)同様比喩によって植物を指示しており、N1とN2の関係もN2がN1の一部分である点から④に分類されるものと同じである。N1とN2との関係を見た場合、4.1.で見た属格の機能からも分かるように属格によって限定をするほうが妥当である。

ではなぜ、「不定のn」による限定をしているのであろうか。

まず、ここに分類されるNPは(16)のような例を除くと殆どが比喩により植物を指示対象にしている。このようなNPは、もとのN1、N2からの予測が不可能であり、他の名詞結合に比べ意味の面でより進行した語彙化が起こった複合語¹⁹⁾といえる。そのために本来属格によって[N1→N2]という構造を示すはずであったものが、単に結合、限定を示していることのみを伝えるために「不定のn」が現われ、定着したものではないか、と推測する。

4. 3. 2. 「不定のn」の[場所]限定用法と属格による限定

続いて、⑤[場所]の限定に分類されるものについて見る。4.1.で見たとおり、属格は基本的に「所属、所有」の意味を表している。従って、[「場所」N1に所属するN2]という

関係は通常属格で表現される。(42)

surguul-ijn bagsh 学校の先生 (42)
 学校-gen. → 先生

⑤の場合属格ではなく「不定のn」により限定されているわけだが、特に多くの例が見られるのが(18)(19)などの"us(an)"による動物名の限定NP(動物名)[usan→N2(動物名)]である。同時に機能上適格と思われる属格による動物名の限定NP(動物名)[usny→N2(動物名)]も見られるため、併せて例示する。((43)(44)が「不定のn」による限定、(45)(46)が属格による限定である)

usa-n xaraacaj アマツバメ (43)
 水-n → ツバメ

usa-n tas ハコウ(コウノトリの一種) (44)
 水-n ⇒ ハゲタカ

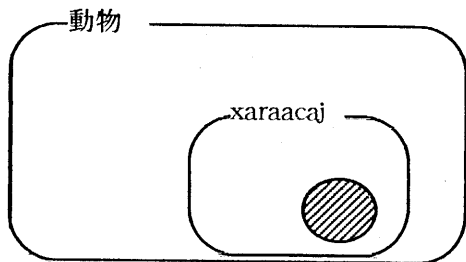
us-n-y bars ノギリエイの一種? (45)
 水-gen. → 虎

us-n-y irves ゼニガタザシ (46)
 水-gen. ⇒ 豹

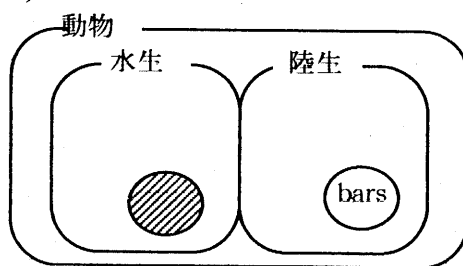
(45)(46)の属格による限定用法は水界への所属(場所)を示すものである。一方、「不定のn」による限定も「場所」つまり[水場]という成分抽出によってN2が限定されている。

一見同じ限定用法を異なる形式で限定しているだけのように見えるが、(45)(46)が本来のN2の指示対象とは全く異なる動物を示しているのに対して、(43)(44)は民俗分類上本来のN2の指示対象の下位語に分類されと思われる動物を示している(下図参照)。

図 (43)



(45)



(網掛け部分がNPの指示対象を示す)

上の図は(43)、(45)のNPの指示対象の領域を模式化したものである。属格による限定(45)の方では、まずusnyによって「陸」に対しての「水辺」という限定がなされ、陸にいる似通った動物になぞらえている。一方「不定のn」による限定(43)の方は(31)のN1"morin"と同じくN2の一特徴を述べているのみの限定である。こうした限定の方法を見ると、やはり形容詞による限定に近い印象をうける。

4. 4. 他の「不定のn」出現条件下における適用の可能性

では、「不定のn」の性質を4.2.のように「意味成分抽出の要素」であると見た場合、他の「不定のn」出現条件下でも適用しうるかどうかにについてそれぞれの出現条件別に、特に二つの語幹を使い分ける場合について見ていきたい。

4. 4. 1. 属格接尾辞接続の際

まず、どのような語の属格接尾辞接続の際に「不定のn」が存在するかを調べるため、コンサルタントとして母語話者であるR.Otgonbaatar氏に協力していただき、小沢(1976)記

載の全名詞を対象に属格形を述べていただいた。結果、属格時「不定のn」の現れる名詞は物質名詞に多く、また他の品詞からの派生名詞には現われにくい傾向がある、とわかった²⁰⁾。これは、前述した物質名詞の方が非物質名詞に比べ意味成分が付与しやすいという仮説と一致する結果であるといえる。

また調査語彙の中に、「不定のn」が現れる場合と現れない場合の二通りの属格形を持つ単語が幾つか見つかった。そのうち、意味による使い分けが顕著なものがあつた。(47)-(51)

・ger(家)	ger-ijn	xün	家人	
	N1-gen. →	人	N1の意味→「家」その他	
	ger-n-ij	xee	ケースの模様	
	N1-n-gen. →	模様	N1の意味→「容器」	(47)

・tug(旗)	tug-ijn	zangi	分隊長	
	N1-gen. →	中隊長	N1の意味→「旗、指導」	
	tug-n-y	ish	旗の柄	
	N1-n-gen. →	柄	N1の意味→「旗」	(48)

・xog(ゴミ)	xog-ijn	mashin	無駄な機械	
	N1-gen. →	機械	N1の意味→「無駄な物」	
	xog-n-y	mashin	ゴミ処理機	
	N1-n-gen. →	機械	N1の意味→「ゴミ」	(49)

・cag(時)	cag-ijn	xuviar	時間割り	
	N1-gen. →	割当	N1の意味→「時」	
	cag-n-y	oosor	時計の鎖	
	N1-n-gen. →	鎖	N1の意味→「時計」	(50)

・sar(月)	sar-y-n	süül	月末	
	N1-gen. →	尻尾	N1の意味→「(暦の)月」	
	sar-n-y	tujaa	月光	
	N1-n-gen. →	光	N1の意味→「(天体の)月」	(51)

(47)-(51)の例では皆、ø語幹形による属格形がN1の一般的、もしくは抽象的な意味を表わしているのに対し、-n語幹形でより具体的、かつ一義的な意味を表わしている。これら使い分けをする語については、一義的になる点で「成分抽出」とみて差し支えないであろう。また、コンサルタントによると「全ての語に『不定のn』がついた形とつかない形がありうる」との感想が得られた上、さらには古いモンゴル語の形において、この二つの語幹が使い分けられていたのではないかという問題提起も小沢(1977)によってなされており、何らかの使い分けがなされていることを予感させる。

4. 4. 2. 与位格, 奪格接尾辞接続時, 位置を示す副詞後続時

これらの場合についても属格同様使い分けをする語が幾つか存在する。(52)(53)

Tenger-ijn	bajdal	xev-d	baj-na.	天気は普通だ。
[空-gen. →	様子]S	[N-dat.]O	[存在する(V)-p.f.]V	
N :	xev(常態, 状態, 形)			

xeve-n-d xij-zh cutga-na. 型に流して鋳造する。
 [N-n-dat.]O [入れる(V)-im.c.→鋳造する(V)-p.f.]V
 N : xev(en)(型, 鋳型) (52)

Bi cag-aas xozhimdo-x-güj. 僕は時間に遅れない。
 [1.sg.nom.]S [N-abl.]O [遅れる-v.n.-neg.]V
 N : cag(時)
 ene cag-n-aas av. この時計から取りなさい。
 [この→ [N-n-abl.]]O [取る-ø(imp.)]V
 N : cag(an)(時計) (53)

(52)(53)も属格接尾辞接続の際同様、-n語幹のほうがより具体的な意味を表しているといえる。又、与位格形、/d/で始まる位置副詞後続時には他の出現条件下に比べ頻繁に-n語幹形が現れる。(54)

minut + -dat.→ minuta-n-d (属格:minut-yn)
 分 分-n-dat.
 asuult + -dat.→ asuulta-n-d (属格:asuult-yn)
 質問 質問-n-dat. (54)

これは直後に来る子音/d/が/n/と同じ調音点であり、連続して発音することが可能であるため、/t-d/という子音連続よりも/t-n-d/という連続のほうが発音しやすいと判断できる。つまり、この類の-nは音韻論上の問題のみに基づく挿入子音-nといえるだろう。/d/音を持つ与位格接尾辞や/d/に始まる副詞との間に-nが挿入されるのは、こうした理由によると思われるが、本稿では示唆に止めておきたい。

4. 4. 3. 造格接尾辞接続時

通常、造格接尾辞接続時には「不定のn」は現われないが、「～と共に」という意味合いを帯びる場合に限り例外的に「不定のn」が現われる。(55)

chono boroo-n-oor (ime). 狼は雨と共に(来る)
 [狼]S [雨-n-ins.]O ([来る(V)-p.f.]V) (55)

用法に限られる点を考えると、「不定のn」が用法限定の役割を果たしていることになるが、この用法はあまり文例が見られない²¹⁾ために判断し難い。

4. 4. 4. 数詞

今まで見てきた「不定のn」は全て名詞におけるものであったが、次に数詞における「不定のn」について見たい。

名詞の「不定のn」と数詞の「不定のn」は出現条件に若干の違いがあり、原則として格接尾辞接続時²²⁾には「不定のn」は現われない。しかし、分数の分母や日付を意味する際に限り例外的に属格、与位格、奪格接尾辞の前に「不定のn」が現われる(Лувсанвандан1980:150)。(56)(57)

ter gurv-yn neg あの3(人)の内の1(人)
 NP[NP[あの→3]-gen.→ 1]
 gurav-n-y neg 三分の一
 NP[3-n-gen.→ 1] (56)

gurv-aas	xojor-yg	xasa-xa-d	neg	bolno.	3-2=1
sub.c.[3-abl.	2-acc.	引く(V)-v.n.-dat.]	1	なる(V)-p.f.	
gurav-n-aas	xojsh			三日以降	
3-n-abl.	後に(Adv.)				(57)

特定の意味（日付，分母）を示すときは「不定のn」によりそれぞれ成分が抽出される。

又，限定辞として数詞が機能する際は通常「不定のn」によって限定するが，「1」を意味するnegが限定辞となるときは例外として「不定のn」が現われない。しかし，二桁以上の数の一の位にnegがくる場合，「不定のn」が現われ名詞を限定する。(58)

neg	xün			一人の人，ある人
1-ø→	人			
arva-n	nege-n	xün		十一人の人
[10-n →	1]-n →	人		(58)

この理由としては，二桁以上の数において一の位で1が使われる場合，数字そのものを述べるのに対し，単なる"neg"の場合「不確定である」という意味が含意されることが多いから，ということが挙げられる。

以上，他の条件下において「意味成分抽出の指標」が適用するかどうかを見たわけだが，「使い分け」を行う語に関しては解釈可能であるといえる。数詞についても一応は解釈可能であろう。

5. 結論

では，今まで述べてきた事項をまとめたい。

本論考察より4.2.で挙げた「不定のn」を「意味成分の抽出を行う接辞的要素」という仮説は支持できるものと考え，「不定のn」の性質として定義する。これは，

名詞句 NP [N1-n → N2]

において，本来のN1の持つ様々な意味成分のうちの一部が「不定のn」によって抽出され，N2が限定されることを意味する。

「不定のn」が現われる限定辞は，意味成分が絞られる点で単一の成分によって定義される形容詞に意味的に近い役割を果たすものの，形容詞による限定とは統語上，及び意味の面でも若干の違いが認められる。

名詞による名詞の限定のもう一つの方法である属格による限定

NP [N1-gen. → N2]

とは，上述の「意味成分の抽出」がなされない点に加え，限定用法にも違いがあることが明らかとなった。

又，この定義は他の「不定のn」出現条件下では，ø語幹との使い分けを行う部分に関しては適応することが観察できたが，それ以外の「不定のn」については今回の研究の対象としなかったため断定できない。

更に借用語につく「不定のn」などには，4.4.2.でも述べたような音韻上の条件も強く関わっているはずである。今回は音韻論的解釈は行わなかったが，それが与位格接尾辞接続時に現れるような挿入子音的なものであると示すことができれば，今後両方の面からの考察が必要となろう。

尚論文執筆にあたり東京外国語大学助手の温品廉三氏に指導及び訳文のチェックを，前

東京外国語大学客員教授R. Otgonbaatar氏にはコンサルタントとしてだけでなく内容に関する助言も数多くいただいた。ここに改めて両氏に謝意を表したい。

表1.

凡例

本論文で使用した略記号は以下の通り。呼称はKullmann(1996)に拠る。

-abl.:	ablative case suffix(/-aas'/)	-acc.:	accusative case suffix(/-ijg,-yg/)
Adj.:	Adjective	Adv.:	Adverb
-com.:	comitative case suffix(/-taj'/)	-dat.:	dative-locative case suffix(/-d/)
-gen.:	genitive case suffix(/-ij(n),-y(n)/)	im.c.:	imperfect converb suffix(/-zh/)
imp.:	imperative	-ins.:	instrumental case suffix(/-aar'/)
N:	Noun(語幹)	-n:	「不定のn」
-neg.:	negative case suffix(/-güj/)	nom.:	nominative case
NP:	Noun Phrase	O:	Object
-p.f.:	present future tense suffix(/-na'/)	S:	Subject
sub.c.:	subordinate clause	V:	Verb(語幹)
-v.n.:	verbal noun suffix(/-x/)	l.sg.:	1st,singular
ø:	-ø suffix	→:	限定の方向

註

1. 本稿で対象としたのは現在モンゴル国内で使用され、モンゴル語諸方言の共通語的性格を有しているモンゴル語ハルハ方言(温品1998:358)である。以下文中の「モンゴル語」はこのハルハ方言を指す。なお公用の文字としてはキリル文字が用いられているが、本稿ではキリル文字表記をラテン式アルファベットに転写して表記した。ただし文献に関してはキリル文字表記のまま掲載する。
2. 用語は定着したものではなく「隠れたn」等別の呼称もあるが、モンゴル語学においてもっとも一般的に用いられる「不定のn」を括弧つきで用いた。なお、「不定」とはいわゆる「定/不定(definite/indefinite)」ではなく「不安定な語幹」を意味する。
3. 本稿は山越(1998)を元に新たに加筆・修正したものである。
4. 以下の文例は下記より収集したものである。なお全ての文例についてネイティヴチェックを受けた。
Цэвэл(1966):(1)(6)(7)(8)(11)(13)(14)(15)(16)(18)(18)(20)(22)(23)(24)(25)(27)(29)(30)(35)(36)(37)(42),
Сампилдэндэв(1993):(12), Өлзийхутаг(1985):(17)(40)(41), Мижиддорж(1974)(21)(31)(32)(43)(44)(45)
(46), Sanders and Bat-Ireedui(1999):(28), Аким(1982):(33)(34), Лувсанвандан(1980):(48)(50)(51)
(52)(53)(56)(57)(58), R.Otgonbaatar氏より採録:(47)(49)(54)(55), 筆者による:(2)(3)(4)(5)(9)(10)(26)(38)
(39)。
5. 12C以前のモンゴル語を指す(Poppe 1999:30)。
6. 古典期モンゴル語が使用された時期にすでにモンゴル語の語彙に取り入れられていた語を指すと思われる。
7. モンゴル語は膠着的性格が強く、造語的・文法的語形変化は語幹に様々な接辞が接続することで実現される(栗林1992b:505)ために1,2,3,の場合には後続する音が制限される。一方,4の場合には後続する単語の音に制限はないため、音韻環境を無視して考察できる。又、モンゴル語のその他の方言において1.の条件に若干違いが見られる(Poppe 1999:17-18, 栗林1988,1992a)ことから4.が重要となってくる。
8. 「銀の貨幣」=「銀貨」と訳出できそうだが、インフォーマントから「ムングンという人間の所有する金」と解釈する方が普通であり、「銀貨」とは解釈しにくいとの回答を得た。
9. モンゴル語の形容詞には形態的な特徴はなく、更に語幹形のまま名詞を限定する。性・数・格の一致はない(Poppe 1951:32)。
10. 分類は山越(1998:13-14)による。
11. usny tereg (水の車):「水を運ぶ車」という語彙があり、そこから類推可能であるとの回答を得た。以下(18)下,(19)下も同様の回答を得た。
12. モンゴルではベストはタルバガを媒体として感染するため、このように呼ばれる。
13. Цэвэл(1966:570)では「社会、自然の過去の状態や発展の状況、それを研究する学問」と定義されている。
14. Сүхбаатар(1997)より。
15. 小沢(1994)より。
16. モンゴル人が家畜として飼育する馬・牛・羊・山羊・駱駝を総称し、このように呼ぶ。
17. モンゴル語の名詞限定の基本語順は、[①属格による限定→[②数詞もしくは数量を表す形容詞→[③形容詞→限定される名詞]]となっている(岡田編訳1989:29)。「不定のn」が現れた名詞は③に位置し、他の名詞を限

定する。

- 18). この点から-nを形容詞派生接尾辞と考える研究者もいる(Kullmann1996:49)。
- 19). 表記は個人個人異なるものの、Өлзийхутаг(1985)ではこれらが一語として認められており、分かち書きがされていない。
- 20). 結果は山越(1998:34)に記載。
- 21). 共同格接尾辞に「～と共に」という意味合いが含まれることに起因するのだろう。この用例は文法書・研究論文等では例が挙がっているものの(Лувсанвандан(1980), 岡田(1989), 谷(1993)etc.), 筆者自身が実際に使用している文を見たことはない。(55)はインフォーマントから採集した例で、モンゴルの格言であるとのことだった。
- 22). 格接尾辞が接続するのは基本的には名詞のみである。名詞的に用いられる場合に限り他の品詞に分類される語にも格接尾辞が接続する。

参考文献

- Bosson, J.E.(1964) *Modern Mongolian*. Bloomington:Indiana University Publishing.
- Hangin, J.G.(1968) *Basic course of Mongolian*. Bloomington:Indiana University Publishing.
- Kullmann, Rita. (1996) *Mongolian Grammar*. Hongkong:Jensco,Ltd.
- Poppe, N. N.(1951) *Khalkha Mongolische Grammatik*. Wiesbaden:Franz steiner verlag GMBH.
- Sanders, Alan J.K. and Bat-Ireedui, J.(1999) *Colloquial Mongolian*. London:Routledge.
- Wierzbicka, Anna. (1988) "What's in a Noun ?" *The Semantics of Grammar*. 463-497, Amsterdam/Philadelphia:John Benjamins Publishing Company.
- Аким, Г.(1982) *Монгол өвөрмөц хэлцийн товч тайлбар толь*. Улаанбаатар:Улсын хэвлэлийн газар.
- Лувсанвандан, Ш.(1980) "Монгол хэлний үгийн эцсийн тогтворгүй"N"-ийн асуудалд". *Монгол хэл шинжлэлийн асуудлууд*. 148-160 Улаанбаатар:Шинжлэх ухаан академийн хэвлэх үйлдвэр.
- Мижиддорж, Го.(1974) *Улсын нэр томъёоны комиссын мэдээ No96-97*. Улаанбаатар :Шинжлэх ухааны академийн хэвлэл.
- Өлзийхутаг, Н.(1985) *Бүгд найрандах Монгол ард улсын бэлчээр хадлан дахь тэжээлийн ургамал таних бичиг*. Улаанбаатар:Улсын хэвлэлийн газар.
- Поппе, Н.(1999(1965)) *Алтайн хэл шинжлэлийн удиртгал*. Улаанбаатар: "Боловсрол" "Гурван эрдэнэ" дээд сургууль.
- Сампилдэндэв, Х.(1993) *Билгийн чанад хязгаарт хүрсэн эрдэмтэн зохиолч*. Улаанбаатар :ШУХЭвлэлийн «Эрдэм» компани.
- Сүхбаатар, О.(1997) *Монгол хэлний харь үгийн толь*. Улаанбаатар:Адмон компани.
- Цэвэл, Я.(1966) *Монгол хэлний товч тайлбар толь*. Улаанбаатар:Улсын хэвлэлийн хэрэг эрхлэх хороо.
- 岡田和行編訳(1989)[監修.小沢重男]『モンゴル語教科書』,東京:東京外国語大学.
- 小沢重男(1976)『モンゴル語基礎1500語』,東京:大学書林.
- (1977)「元朝秘史モンゴル語に於けるoki(幹乞)について」『東京外国語大学論集 AREA AND CULTURE STUDIES』第27号, 89-99.
- (1994)『現代モンゴル語辞典 改訂増補版』,東京:大学書林.
- 栗林均(1988)「オイラト語」『言語学大辞典 第1巻』,東京:三省堂,971-974.
- (1992a)「ブリアート語」『言語学大辞典 第3巻』,東京:三省堂,814-827.
- (1992b)「モンゴル語」『言語学大辞典 第4巻』,東京:三省堂,501-517.
- ユージン.N.ナイダ(1977)『意味の構造 -成分分析』,Trans. N.S.ブラネン,東京:研究社.
- 谷博之編(1993)[監修.橋本勝]『モンゴル語 文法・購読』,東京:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

温品廉三(1998)「モンゴル語」東京外国語大学語学研究所編『世界の言語ガイドブック2(アジア・アフリカ地域)』,東京:三省堂,358-373.

山越康裕(1998)「モンゴル語の名詞限定用法から見た『不定のn』の性質に関する考察」卒業論文
ジェフリー・リーチ(1977(1974))『現代意味論』,Trans. 安藤貞雄,東京:研究社.

(東京外国語大学大学院地域文化研究科博士前期課程アジア第一専攻在学中)